
子育て支援の一方策 高校生保育体験講座に参加して

地域・保育施設・保育者養成校・学校教育の連携実践

大野 雄子・佐久間 敦子

A Step Toward Supporting Childcare:
Participating in a High School Childcare Experience Course
Collaborative Practice among Local Communities, Childcare Facilities,
Childcare Training Schools, and School Education

Yuko OHNO / Atsuko SAKUMA

キーワード：子育て支援、保育体験、高大連携、地域連携、職業教育

保育者の人材不足が顕在化する一方で、18歳人口は減少の一途を辿っている。そんな中、高等学校の進路指導は、職業指導に踏み込んで保育体験を行うなど丁寧な指導を心掛けている。養成校側も保育の仕事ができる限り理解したうえでの志願を望んでいる。この保育体験の好事例には人と人をつなぐ存在が必要であった。高校生を支援する人々の言葉から多面的に子ども（園児・高校生）中心の街づくりと子育て支援について考察した。

1 はじめに

少子高齢化社会の課題解決の一つに、「地域で子育て」や「保育施設の充実」が言われているが、保育者の人材不足という現実的な問題がある。こども家庭庁の示す「保育士の有効求人倍率の推移」⁽¹⁾によると保育士の有効求人倍率は、2.49倍（全国 令和4年10月時点）であり、前年度に比べると0.17ポイントの下落となったが、全職種の1.35倍に比較すると依然として高い水準で推移している。更に千葉県の待機児童数は、令和5年4月1日現在で140人（待機児童率0.11%）と全国的に高い状況が続いている⁽²⁾。市町村において保育所等の利用定員数⁽³⁾の増加をはかるなどの対策が取られているが、令和4年度に前年度に対し100人以上定員を増加した地方自治体⁽⁴⁾に柏市、印西市、千葉市、市川市、四街道市、八千代市、流山市、市原市が入るなど千葉県においてはその数が顕著である。

一方で18歳人口の急激な減少が追い打ちをかけている⁽⁵⁾。中・高校生の将来なりたい職業の中に「保育者」は変わらずランクインされるが、就業にまでつながらない現実がある。また、大学に入学してから、または入職して数年で考えていた職業観と違うという理由で保育者の仕事をあきらめる場合も増えている。保育人材の確保に向けた様々な対策が自治体により取られてはいる⁽⁶⁾が、高校生にとって自分自身に適した進路を選択していくうえで職業を体験する場が必要で

あろう。とりわけ私たちは保育者養成校として、高校生がより丁寧な進路選択ができるよう「大学の授業の体験」「保育施設での職場体験」等を高大連携の視点から考えている。

本学の卒業生は、ほとんどが保育園・幼稚園・社会福祉施設で働いており、県内各地に卒業生が勤務する施設がある。今回ご協力を頂いたあかしあこども園はその中の一つであるが、「地域人材の育成」「地域の子育て環境の醸成」を目指し、その母体である社会福祉法人九十九里ホームが中心となり「高校生のための保育セミナー」を実施している。旭市、匝瑳市、横芝光町、山武市近隣地域に在住の高校生が積極的に参加している事例である。本学からは筆者らが「手袋人形を作ろう」、「子どもの心と遊びの関係」のテーマで2回の出前授業を行った。

短大の講座を受講や、保育現場での子どもとの直接的な体験をとおり、保育に対する職業理解や進路学習を行うというプロジェクトを実践し、やがて保育人材として地域に還元できる方策を考えるとともに、今後、保育者養成校としての高校生への可能な支援について検討したい。

本事例については、筆者らは一端を担っているに過ぎない。プロジェクトを主催された九十九里ホーム法人本部 相澤雅則氏や、あかしあこども園 藍恒子園長先生、受講生を送ってくださった高校、養成校による職業教育や子育て支援にあたる好事例であると思われる。皆様にご協力いただいたインタビューからご意見を多面的に捉え、養成校が今後取り組むべき連携について探る。

2 「高校生のための保育セミナー」の主旨と目的について

先にも述べたがこのプロジェクト「高校生のための保育セミナー」の主催は、九十九里ホーム相澤氏である。本プロジェクトを始めるうえでの趣旨と目的についてお話しいただいた。

***** 【九十九里ホーム法人本部 相澤 雅則 様】

(1) このプロジェクトを始められた想い、目的

近年、当地域は人口減少が著しく、特に若者が都市部へ進学し卒業後に地元で希望の就職先がないことが要因の一つである。そのために高校生の進路選択の時期に保育の仕事に興味を持ち、将来地域の子育て支援に携わる人材になることによる人口減少対策を目的に計画した。また、高校生のキャリア教育は職業人としての基礎的資質を養うものであり、そのための活動には学校だけでなく地域の企業が連携を図り自ら次世代の育成に取り組むことが必要と感じている。

その他にも進路に悩む高校生が孤独感を感じ消極的な学生生活に陥ることを防ぐためにもセミナー開催及び職場体験を行い、仕事に就くことの不安の解消を図ることを支援する必要がある、その取り組みの一つとして「高校生のための保育セミナー」を実施した。

(2) 地域・保育施設・養成校・高校を繋ぐことにより得られること

地域の一員である高校生がどのような学生生活を送っているか、将来の生活に何を望んでいるのかに加えて、どのような不安や悩みを抱えているのかを知ることができた。特にコロナ禍において高校生が多くの制約の中で過ごしてきたことから、職場見学などの活動が実現できずに進路選択に不安を感じている生徒の存在を把握することができた。

また、保育施設・高校・養成校は各分野における役割は様々であり価値観の相違があることも理解できるが、それらの調整を図り共通の目的でもある子育て支援を一体的に実施することで、役割を一層発揮することができることに気づかされた。

(3) 養成校に望むこと

保育者養成校は子育て支援の専門職教育を目的としているが、子どもを中心とした地域社会の課題に目を向けることができる学生の教育を実践してほしい。そのためには、学生の時期にボランティアなど地域の様々な活動に参加して、地域の課題に気づくことができる専門職を育成してほしいと考える。

3 保育園側から見た職場体験の受け入れる理由

保育体験を受け入れてくださっているのは、高校生が通学をする地元の保育施設である。あかしあこども園の園長先生に受け入れ側の保育施設の立場としてお話をうかがった。

*****【あかしあこども園園長 藍 恒子 先生】

(1) あかしあこども園で、中学・高校生の職場体験を受け入れている理由について教えてください。

あかしあこども園は、積極的に職場体験を受け入れています。その理由は三つあります。

まずは、中学生、高校生が将来、保育教諭になりたいという夢の実現のためには、必要不可欠であると考えからです。教室の中の学習だけでなく、実際の職場で保育と言う仕事を体験する、また子どもや職員とのかかわりなどを経験することで、働くことの意義や保育の実務をよく理解できると思います。保育の中で子どもと思いきり遊び、活動することは、とても楽しいことです。早期にこの仕事の魅力に出会い、楽しさや遣り甲斐を積み重ねてほしいと思います。

次に、中学生、高校生が職場体験に来てくれることにより、園児が喜び、日常とは違った体験を味わうことができます。子どもにとって様々な人との出会いは、人間関係の力を向上させます。中学生や高校生は保育者とは違い、歳の近いお兄さん、お姉さんとして憧れの存在でしょう。子どもたちがいつもと違う表情や言動で遊びに参加する姿を見ることは、職員にとっても学ぶことが多く、よい刺激になります。

三つめは、社会の構成員として、共に助け合って生きる心を養い、社会奉仕の精神の涵養になるということです。私たちの人を大切にする想いは、地域社会に広がり、子どもたちが地域からより温かく見守られる土壌を作るように思うのです。例えば、来てくださった中学生も高校生も家庭で「こんな体験をしてきたよ」と話されるでしょう。また、園児も「きょうは、おにいさん、おねえさんがきたよ」と保護者に伝えることでしょう。そのような地域の人々の交流や関心の積み重ねが結果として園児が育つ豊かな土壌を作ることなのだと思います。将来的に共に、職場体験に来てくださった生徒が保育者の道を歩んでくださったり、一緒にお仕事ができたりするととても嬉しいです。

4 高等学校におけるキャリア教育について

少子高齢化の進む中で、やがて社会の担い手となる高校生の進路意識や保護者の考えにはどのような傾向があるのか。また、高等学校における進路選択の過程や高校生の職業観の育成はどのようななされているのかなどを「高校生のための保育セミナー」に参加している高等学校の進路部長に聞き取りをし、主に①学校の取り組み、②体験講座・職業教育の評価の項目でまとめた。

今回聞き取りをした四つの高校は、キャリア教育の実践が10年以上前から継続して行われて

おり、地域人材の育成に力点を置きつつ、より深い職業理解と具体的実践的な学習の機会を設定している。

生徒たちは、進路講演会や、分科会などで希望する分野についてより詳しく調べたり、聞いたりして学習を進めていく。いずれの高校もインターンシップや企業見学などの体験を通じた、職業理解を重視しており、職場を見て、実際の業務にかかわる経験により、より深い理解の上で進路を選択していくことになり、単に進学と就職という選択ではなく、就業を見据えた進路選択を考える傾向もみられそれぞれの取り組みに成果がみられている。

(1) * * * * * 【千葉県立匝瑳高等学校 角田 利幸 教諭】

①学校の取り組み

「地域人材の育成」・「地域の活性化に貢献できる人材育成」を目指し、職業理解と実際の体験を通じた学習やインターンシップを推奨してきた。医療・看護系や保育に関するインターンシップは希望者に実施している。本校は総合学科がスタートし職業探究の時間設定も予定されており、今後も重要な取り組みになる。

②体験講座・職業教育の評価

小学校からキャリア教育は始まっているが、表面的な理解にとどまらず、職業の現場を直に見る、業務の一端を経験することで職業に対する理解を深めることができた。また体験することで、自分の適性や意識を確認でき進路選択のミスマッチを防ぐことにもなる。

将来の進路として医療・看護系、保育系を希望する生徒は、こうした体験講座で、より意識を強く持ち進路選択に生かし、進路決定ができ、地域での活躍も期待される。

九十九里ホーム・あかしあこども園保育体験講座には、男子生徒・女子生徒共に毎回数名が参加し、進路選択の参考にさせていただいている。

(2) * * * * * 【千葉県立松尾高等学校 齋藤 義弘 教諭・成田 勝弘 教諭】

①学校の取り組み

キャリア教育は長く本校で取り組んできたものだが、特に「地域人材の育成」は保護者や地域の願いでもある。本校では、総合的な探究の時間において「地域を知る」「グローバル」というテーマで学習が設定されており、地域の商店、地域の企業を知るプログラムがある。有名な名前の企業という部分ではなく、工業団地の中にある企業が実際にどのような会社なのか、何を作っているのか、どのような役割を担っているのかなど、現状を知ることが目的としている。進路選択が、進学・就職ということではなく、その先の職業選択を見据えた将来設計として位置づけられるようにしたいと考えている。生徒全体に行うものとしては、進路講話を年1回、1事業所の方にお願ひし、これまで地域の歯科医師、地元企業、成田空港関連、新聞記者の方などに職業人講話として職業の現場の方の声を直に聴くことができた。

インターンシップを企業や医療・看護、保育・福祉等の分野で実施しているのは、職業選択に行きつく進路選択、そのためにしっかりした職業理解を求めたいと考えたからである。単に憧れだけでなく、職業にかかる資格や適性、業務内容、職場での人間関係など、実態を踏まえて考える機会になり、ミスマッチを防ぐ上でも重要な学びとなっている。本校では、進路学習として「地域フィールドワーク」の設定があり、1年生全員が取り組むことになっており、大学・短大、企業20社程度の協力を得て聞き取りや1～2日の見学等の体験を設定している。大人と話すこと

が苦手な生徒もいるが、このような体験の中で、話す場面が必要となるなど、副次的な効果も出ている。また教師が把握していない生徒の一面、良さが見えるなど、進路適性でも多方面から把握できることもある（コロナ禍とクラス減による人員不足の影響で、現時点でこの活動は休止しているが、できる形で継承することを考えている）。

資格や適性が求められる職業のインターンシップの具体例として、保育士希望者にはあかしあこども園、中央保育園他、生徒の出身園数か所に依頼し、希望者全員が1～5日間のインターンシップ体験を実施した。栄養士・歯科衛生士、看護師等の希望者も多く、地域の事業所に受け入れていただいた。

②体験講座・職業教育の評価

保育系・福祉系・医療看護系に関しては、体験した生徒の多くは職業選択にまで結び付くことが多く、体験を通し、より意識が高まる効果が大きいと思われる。また、学校生活では見られなかった生徒の良さや可能性が発揮されることもあるなど、体験で触発される能力、見いだせる可能性があることなど、想定外の効果も見られ、今後も大切にしたいと考えている。

本校は、保護者も地域も、生徒自身も、地元に対する思いが強く、将来的にもこの地域に定着することを希望しているため、また本校の地域貢献の人材育成の点からも、保育体験講座等がより工夫され地域人材の育成と定着に貢献することを期待している。

(3) * * * * * 【敬愛大学八日市場高等学校】

①学校の取り組み

本校では、10年以上前から実践的な職業教育が行われており、入学直後から進路学習が始められる。

生徒も保護者も地元志向が強く、県内での進学や地元企業への就職を希望する傾向が強いため、地域の企業や事業所の協力を得て、職業理解や現場体験を重視した進路学習を設定し、各自が進路実現できるよう支援している。

1・2年次からの進路学習をもとに、3年次は各自テーマを決めて調べ学習を行い、テーマに沿った制作や実習などの体験活動を行い、レポートにまとめ、発表する学習に取り組んでいる。発表までの学習を行うため、職業教育にとどまらず総合的な学力の向上にも役立っている。

テーマ学習については、例えば、栄養士を目指すものは、カロリー計算や具体的な献立を考案し調理し試食するなどの活動を行い、高血圧症の改善に向けた食事、あるいは高齢者、乳幼児の食事などのレポートをまとめることで、より具体的な「栄養士」の職業理解やイメージが持てるようになる。

あかしあこども園での保育体験は、特にコロナ禍の進路学習、体験において、生徒を参加させることができ実践的な体験学習ができ、生徒の進路選択に役立った。本校では保育園等でのインターンシップを他の保育園や保育施設でも実施してきたが、受け入れ施設の事情に応じて1～5日間の体験を行い、学校での学習と保育現場での実習で職業理解も深まり、子どもがかわいい、楽しいといった表面的なイメージだけでなく、保育士の責任や、現場の課題などに触れることができ、職業観の育成や、より良い進路選択につながっている。

②体験講座・職業教育の評価

体験講座に参加する生徒は、体験する施設に自分で連絡を入れ、アポイントを取り、健康調査

票や必要な書類を作成し、手続きを取ることになるが、こうした過程が、社会常識やコミュニケーション力を鍛えることになり、生徒の成長につながっている。

インターンシップに出る前に、絵本の作成や、エプロンシアターの制作など、事前に学習することで、保育現場に出るための意識や興味・関心も高まり、学習の過程で学んだことが、現場で確認出来るなど学習自体の深まりも見られる。

漠然として進路希望が、高校での学習と保育施設での体験を通し具体的な職業理解につながり、より具体的な進路目標となり、職業につながっているケースが多く、地域で活躍する卒業生が多いのも成果の一つと考えている。

(4) **** 【横芝敬愛高等学校 菱木 仙之助 教諭】

①本校の取り組み

職業理解の講座や体験は、継続して実践してきたが、ここ数年は「キャリアセミナー」と名付けたプログラムを行っている。生徒全体に向けては進路講演会として、起業して活躍している卒業生や、大学教授などの専門職の卒業生を招いて講演いただくこと、また分科会形式で、13講座程度を設定し、それぞれの興味・関心、希望に応じて参加するようにしている。講師は、警察や役場の方、地域の企業、事業所の方に依頼し、職業について具体的なお話をいただいている。生徒たちは調べ学習での情報と、分科会で直にその職業について話していただくことで、より具体的にイメージでき、職業理解を深めることができるだろうと期待している。

地域を大切にしようという思いが保護者にも生徒にもあり、卒業生の中には、家業を継ぎ発展させようと頑張る方、起業して地域に貢献している方、野球選手や教育者、保育や福祉関連に従事する方がたくさんいることも本校の特色である。

インターンシップについては、コロナ禍もあってしばらく休止していたが、地域の保育園での体験はこれまで実施していた。今は、あかしあこども園の保育体験に生徒を送っている。実際に保育現場を体験し子どもたちとのかかわりや先生方の姿を見、話を聞くことができることは、「保育」のイメージや具体的な仕事の内容、楽しさだけでなく、大変さも感じることで、進路を考える上で重要な経験になっている。

②体験講座・職業教育の評価

職業体験は表面的でない、より本質的な職業理解につながり重要なものと考えているが、とりわけ保育体験講座は、保育の現場で子どもたちと関わり、保育者の言動を見聞きし、楽しさも大変さも体感することができ、多方面から「保育」を考え、職業の良い所や課題も理解することになる。

保育体験講座に参加する生徒は、そもそも保育系の進学や就職を希望しているが、実際に体験する中で生徒自身の適性や可能性を実感でき、進路のミスマッチを防ぐことにも役立っている。

(文責：佐久間)

5 保育者養成校の出前授業に臨んでの振り返り

**** 大野 雄子

保育者として大切なことは何だろうと考えると、どのような子どもになって欲しいかという願いを持ち、個々に応じる目と集団に応じる目を使い分けながら子どもたちの興味に即した環境づ

くりや共感的な関わりが思い浮かぶ。そして、このような子ども観を意識した経験の積み重ねが、徐々に保育者としての保育観を形成して行くのではないだろうか。しかし、保育への道の第一歩として保育体験に臨む高校生は、近くに幼い子が居り世話をした経験がない限り、子どもとの出会いはわずかであり、その対応や気持ちの理解は、自身の子どもの頃を振り返るなどの限定的なものになってしまう。保育は、子どもとの出会いや関係性から始まり、関係性から生まれる力が原動力となる場合が多い。

まずは、子ども理解の第一歩として、関わりの糸口になるような遊具作り「手袋人形をつくろう」という講座を行った。子どもとの関係づくりの媒介物となる児童文化教材は、今後行われるであろう子どもとのふれあいの中でいつでも活用できるとよいと思っている。

また、2回目の講座は、年齢による認知や社会性、道徳性の発達理解や子どもの心理発達と遊びの関係について講座を行った。例えば、3歳児は一人遊びや並行遊びが多いが、5歳児になるとルールのある遊びができるようになる。7、8か月の赤ちゃんが人見知りをするのは、愛着対象との関係性が育っている現れなど、あらかじめ理解することで、子どもとのふれあいに一つの観点を持つことができる。また、子どもと上手くコミュニケーションが取れない場合があったとしても、発達の観点から理由があることがわかるであろう。

これからも高校生や保育施設のニーズを活かし養成機関として、単に普通の大学と同じ授業をするのではなく、保育に踏み出そうとする第一歩を支える講座の充実を図って行きたいと思っている。

6 人と人を「つなぐ」ということ

***** プロジェクト主宰者 九十九里ホーム 相澤 雅則 様

(1) 人と人をつなぐことについて、地域と福祉の観点から感じるがありましたら教えてください。

人と人をつなぐコーディネーターは、つながりの効果について十分に理解した上で各自のニーズを把握して 双方のメリットにつながる役割を果たす必要があると考えている。具体的に今回の保育体験の活動は、進路選択に悩む生徒が通う高校の進路指導の支援となることに増して、多くの学生募集の必要がある養成校や人材確保を望む保育施設が三位一体で活動することにより、子どもたちの安心と希望につながるため、養成校の経営支援、保育施設の維持と子育て支援サービスの向上が関連していると考えられる。また、何より高校性自身が人と人とのつながり通じて孤独・孤立の解消となり、社会問題となっている不登校や引きこもりの防止になることを視野に入れ、子どもたちのみならず、すべての人にやさしいまちづくりを実現することを目指したい。

***** 本学コーディネーター 佐久間 敦子

(2) 保育施設、高等学校、地域をつなぐことの好循環について

「子育て支援」のとらえ方を考えると、まずは「子育て」に対するサポートが挙げられ、多くの人は、保護者へのサポートを想起するだろう。また子どもたちの保育や、その機会、場所、行政の支援、制度や仕組みを考えることが「子育て支援」であると言い切る人もいるだろう。

私は、誰にとっても生きやすい社会という視点を提案したい。障害者や高齢者、乳幼児、どん

な人も自分らしく生きていける社会作りの視点でとらえると、「子育て支援」の幅は一気に拡大する。その上で、保育人材の養成校としての短大の役割は何か、何ができるかを検討したい。とりわけ高等学校でのキャリア教育との連携、接続を考えることが重要ではないかと考えている。子どもや保護者の理解、「保育」や「保育職」への理解に基づく進路選択、その先の就業までを見据えた実践的な取り組みで地域人材を養成することは、何よりの「子育て支援」ではないかと考えており、あかしあこども園や九十九里ホームの構築した「高校生のための保育セミナー」に本学として積極的に協力することを期待している。

また、このような地域の学校、施設、その上で行政も含めた包括的な協力関係を他の地域でも展開できれば、小さな地域だけでなく、千葉県全体の子育て支援になり、少子化の多少の改善の方策になりうると考えている。

高校教育の実践がすでに示すように、体験を通じた現場での実践や学習が、より深い職業理解、職業選択の一助となっていることは、このようなプログラムの有効性を示すものであり、本学の教育資源を提供することは、養成校としての社会的責任を全うすることでもあると考えている。

そこで、それぞれの機関、それぞれの教育や取り組みをつなぐ、役割が重要になるが、仕組みができ、一つずつ事業を実行していく中で、「つなぐ」役割を担う人材も育ち、継承していけるものと確信している。

7 考察とまとめ

(1) 保育者養成校である本学が今取り組むべき高大連携

今回のインタビューにより、それぞれの高等学校が丁寧に職業指導を行い保育の仕事を実際に見ることによって保育の仕事を理解しミスマッチを防ぐ努力を行っていることがよくわかった。

私たち養成校はオープンキャンパスの中で、入学者受け入れに関する方針であるアドミッションポリシーを伝えている。本学の場合、「①保育者を目指す明確な意思をもち、生活面・健康面での自己管理ができ、学び続けることのできる人 ②日頃より保育に関する事柄に広く関心をもち、子どもの成長・発達について理解を深めようとする態度をもっている人 ③対人関係能力に優れ、他者と協働し思いやりをもって子どもたちと関わるができる人」という内容である。これらは、保育の場を見ていないとなかなかイメージができないものである。本学としてもボランティアや保育体験を行うことを推奨はしているものの、実際に高校生を保育施設やボランティアに繋げるということはできていない。そこで相澤氏のいう地域のニーズを把握した「三位一体の活動」の推進は、今回のように地元の高等学校、地元の保育施設、養成校が目に見える連携ができた「三方良し」の好事例につながったものと思われる。如何に人と人を丁寧に繋げる存在が大切かということが今回得たことだった。高校生が一步踏み出すように、養成校としても一步踏み出しそのつながりに常に開かれていたい思いである。

(2) 地域の子育て支援と街づくり

別の視点でこの事例を捉えると、地元の高校生が地元の保育施設に保育体験に行く利点が挙げられる。まず、高校生にとっては通いやすく勧めやすい、出身園であるなどの身近な場であるかもしれない。また、藍園長先生が仰るように保育施設が高校生を受け入れることにより、保育施設が地域により一層開かれ、園児が温かく見守られる子育て支援の豊かな土壌づくりに繋がって

いるのは確かである。園児の他に高校生にとっても地域の協力により職業体験の場として受け入れられ、人材育成に繋がることは、もう一方の子育て支援の機会となっている。子どもたちが中心にいる街づくりの実現化とは、この様な形から始まるのかもしれない。この素晴らしいプロジェクトに養成校として参加できたことを心から感謝し、今後も子どもが真ん中にあるプロジェクトとして、子どもの成長、地域の発展に注目しつつ今後も取り組んでいきたい。

〔謝辞〕 本稿をまとめるにあたり、インタビューにご協力いただきました九十九里ホーム、あかしあこども園、千葉県立匝瑳高等学校、千葉県立松尾高等学校、敬愛大学八日市場高等学校、横芝敬愛高等学校の皆様に心より御礼申し上げます。

■参考資料

- (1) こども家庭庁 有効求人倍率推移（全国） 20230401_policies_hoiku_05.pdf
- (2)(3) 千葉県ホームページ 待機児童数の推移 市町村別保育所等利用待機児童数／保育所等の利用定員数 <https://www.pref.chiba.lg.jp/kosodate/hoikusho/jouhou/taiki/documents/r050401itiran.pdf>
- (4) 保育所等関連状況取りまとめ（令和5年4月1日）及び「新子育て安心プラン」集計結果 こども家庭庁（令和5（2023）年9月1日） <https://www.cfa.go.jp/policies/hoiku/torimatome/r5/>
- (5) 中央教育審議会大学部会将来構想部会（第13期）配布資料2 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/042/siryo/1401754.htm
- (6) こども家庭庁第2回子ども・子育て支援等に関する企画委員会資料2 保育士の復職支援について こども家庭庁（令和5〔2023〕年11月） https://www.cfa.go.jp/councils/shingikai/kodomo_kosodate/kikaku/XegqFr99/